

門井慶喜／咲くやこの花インタビューvol.10

門井慶喜(かどい・よしのぶ)【平成 28 年度 文芸・その他部門[作家]】



近年、直木賞候補作家の一人として受賞が有力視される群馬生まれの 46 歳、門井慶喜さん。中高を栃木で過ごし、大学は京都の同志社大学へ進学。文学部に学び、卒業後は数年の会社員生活を経て平成 15 年、「キッドナッパーズ」での第 42 回オール讀物推理小説新人賞受賞を機に作家デビューを飾りました。平成 27 年『東京帝大叡古(えーこ)教授』、翌年には『家康、江戸を建てる』で、それぞれ直木賞候補にノミネート。平成 28 年には『マジカル・ヒストリー・ツアー ミステリと美術で読む近代』で第 69 回日本推理作家協会賞[評論その他部門]を受賞。同年、咲くやこの花賞にも輝きました。今秋には、咲くやこの花コレクションと題した記念イベント「門井慶喜 講演会」が、大阪市立中央図書館で開催されます。講演に先駆け、最新刊『銀河鉄道の夜』を上梓したばかりの門井さんにお話を伺いました。ミステリーから歴史小説まで幅広い創作活動の秘訣や、「楽観的だからへこたれなかった」という作家になるまでの経緯とは？

◎取材・文・撮影＝石橋法子

「作家になろう！と決意した瞬間が、僕にはないんです」

今回は、門井さん行きつけのイタリアンレストラン＆カフェでお話を伺います。よく息抜きに来られる場所なのですか？

駅に近くて半個室なので、たまに取材などで利用しています。息抜きには、先日ひとりで USJ(ユニバーサル・スタジオ・ジャパン)に行きました。もちろん、ちゃんと1本原稿を書き上げた後にですよ。ジェットコースターに乗りたくて、1時半ぐらい並んで初めてハリー・ポッターのアトラクションも体験しました。それを何気なく編集者に話したら、「家族サービスならまだしも、そんな暇があるのなら原稿を書いてください」と怒られました。梅田の書店員さんはノッてくれたんですけどね、「あの後ろ向きに乗るやつ怖いですよね〜」って(笑)。ジェットコースターが良いのは、考えないことを強制してくれるから。一種の心のリセットでもあるんじゃないかな、というのが理屈です。

(笑)。改めまして、28年度「咲くやこの花賞」受賞おめでとうございます。近年は直木賞候補としても有力視されるなど一層のご活躍です。

ありがとうございます。僕としては毎年が全力投球ですので(ノミネートが続いたのは)、たまたまという感じですね。咲くやこの花賞については、随分前に作家の万城目学さんからお聞きしていて、存在は知っていました。共著『ぼくらの近代建築デラックス!』の取材で大阪市中央公会堂を訪れた際に、万城目さんが「(咲くやこの花賞の)授賞式をここでやったんですよ」と。ただ僕は、群馬県生まれの栃木県育ち。大人になってから関西に来た人間なので、万城目さんほどには浪花っぽくない。だから、ご縁がないものだとはばかり思っていました。お話を頂いたときは「大阪府民として認めていただけたのかな」という嬉しさがありました。

門井さんと大阪を繋ぐエピソードがあれば、お聞かせください。

歴史が好きですから色々調べていくと、大阪にも様々な歴史的エピソードがあるなと思います。新選組が大阪支社を作ったり、福沢諭吉は大分県の中津藩士ですが、生まれは大阪の堂島。自叙伝『福翁自伝』にも書かれていますが、父親が亡くなったことで6才前後で初めて彼は故郷の大分県に帰るのですが、言葉が違うことでいじめられたそうです。少なくとも子供の頃は、大阪弁だったんだとか。

僕は父親が歴史好きなこともあり、子供の頃から歴史には関心がありました。僕の名前は父の名前から「喜」の一文字をもらっていますが、徳川慶喜からは二文字ももらっている(笑)。慶喜については、家康以来の天才だと誉める人もいれば、大阪城から逃げ出した江戸幕府を終わらせたヤツとぼろかすに言う人もいる。両極端に評価が別れる人なので、子供心に「どうせなら誰も悪く言わない、(坂本)竜馬にしてくれたらよかったのに」と思っていました(笑)。

現在は、大阪が活動の拠点なのですね。

京都の大学を卒業後、一旦は就職のために実家の宇都宮に帰りました。その後、新人賞をきっかけに、30代前半で大阪に引っ越してきて約10年になります。最初は京都に仕事場を構えていたので、作品も4冊目までは、京阪電車で京都に通って書いていましたね。お陰さまで忙しくなってくると、そういう道楽もしていられないので、今は一軒家の自宅を挟んだ向かいのマンションに2LDKの部屋を借りています。そこが書庫兼仕事部屋です。大阪に住むようになってからは、滋賀、神戸にも興味が出てきましたね。

賞を獲得することは、作家活動の励みにもなりますか。

賞というのは候補になるだけでも嬉しいものです。時々お笑い芸人さんを見ていて、自分の芸の反応が即座に分かって、「羨ましいな」と思うことがあります。僕らは読者が読んでいる姿を見られませんし、たとえ目にしたところで心の中までは分からない。僕らの仕事は、暗闇に向かって石を投げているようなもの。それがときどき、暗闇の奥の方から「なかなか良いことやってるぞ〜」と反応が帰ってくるのが、文学賞だったりするので。それはすごく嬉しいです。



作家の夢はいつ頃から？ やはり本好きの少年だったのでしょうか。

読書は好きだったようです。父が読書好きで、小さいころから本が手元にある環境に育ちました。人生で一番最初に読み通せた活字だけの本が「国語辞典」でした。確か、小学校の入学祝として両親から贈られたものだと思います。絵本以外の“おとなの本”は、最初から最後まで「通読するものだ」と思い込んでいた。当時、辞典というものを知らなかったんですね。最初はすごく面白かったです。自分が無意識で使っている言葉をピタッと定義してくれるわけですから。あ行、か行までは良かった。でもその後は飽きたんでしょうね、砂を噛むような思いで読破しました(笑)。全然頭に入っていなかったと思います。僕の記憶では相当に分厚かったのですが、小学生向けの辞典なので今思えば、それほどでもなかったでしょうね。

幼少期に得た語彙力を活かして、作家の道に？

僕は作家になろうと決意した瞬間がないんです。「作家になるもんだ」と、思い込んでいた。子供の頃から小説が好きで、シャーロック・ホームズ、アガサ・クリスティーとたくさん読みました。江戸川乱歩、中学生の頃は赤川次郎も大好きでした。読書を通して自然と「自分は作家になるものだ」と思っていた。だから、「作家になりたい」と思った段階が僕にはないんですね。そんな感じで大人になって、大学も卒業が近づくと、みんな就職先を探すじゃないですか。そこでふと思ったんです、「ひょっとすると、小説というものを書かないと作家にはなれないのではないかと」。22歳にして、初めて気づいた世界の大哲理(笑)。

(笑)。卒業後は、社会人として働きながらご実家のある宇都宮で小説を書き始めます。

就職先は、実家の近くでした。最初は帰宅後に小説を書いていたのですが、どうしても仕事の疲れもあり頭が働かない。そこで、出勤前に書く朝方のスタイルに変えました。じつは上が100を切るほどの低血圧なのですが、そこは意志の力で克服しました(笑)。

朝は5時半に起きてバナナで血糖値を上げて、コーヒーか紅茶を飲めば一発で目が覚めます。バナナは下手なエナジードリンクよりも速効性がありますよ。朝に書く習慣はいまでも継続中です。忙しくなるにつれて起きる時間も早まり、今は早朝4時に起きています。夜は21時には寝ています。子供より早いですね。

独学で小説を書き初めて、約10年でデビューのチャンスをつかみます。その間、作家になるだろうという確信が揺らぐことはなかったのでしょうか。

もちろん、各新人賞の最終選考止まりで終わったことが6回はありましたが、現実にはなかなか作家になれないなとは思いましたが。でも、「なるだろうな」というイメージは変わらなかった。だから、何回落ちてもへこたれない、僕にとっては、落ちる方がイレギュラーなんですよね(笑)。漠然とのんびりとした感じで、どこか(のタイミング)でなるはずだと。それぞれに落ちた瞬間はショックなんですけど、全体として楽天的であった。だからこそ、がんばれたというはあるんじゃないですかね。実力の話ではなく勝手なイメージの問題ですが、まあ、一種の勤ちがいかもしれませんね(笑)。

それは性格、あるいは作家になるという一点において楽観的だったのでしょうか？

他の面でも楽観的な方だと思います。少なくとも、やりもしないうちから「失敗したらどうしよう」とは考えない。失敗したときのことを考える能力が、欠如していますね(笑)。

「正解ではなく、ありのままを差し出すまでが小説の役割」

2017 年 10 月に講談社から最新刊『銀河鉄道の父』が発売されました。宮沢賢治の家族とその生涯を、父親の政次郎の視点から綴った家族の物語です。後世に名の知れた偉大な作家にも父があり家族があり、夢を追求める“ふつうの少年”時代があったことに改めて気づかされました。本著のご取材などを受けるなかで、「自分はこういうことを書きたかったんだな」と再確認された部分などあれば、お聞かせください。

宮沢賢治の父、政次郎は明治、大正の父親ですけど、じつは(彼を通して)現代の父親を書きたかったんだと。あるいは、この本にいるのは現代の父親なんだろうなど。

だとすれば、なぜストレートに現代の設定ではなかったのでしょうか。宮沢賢治親子に材を得た理由とは？

やはり、(本著に書いた)息子のキャラクターを現代小説で書くと、嘘臭くなるんじゃないでしょうか。賢治って簡単に言えば「社会的能力のない天才」じゃないですか。それを現代の息子として描くと、作者の作り過ぎでしょ、となる。でも実際に賢治は(父親に)迷惑をかけている。お金、就職、宗教の面でも。そういう息子像というのは歴史的背景と、宮沢賢治という誰もが名前を知るような人物を介せば、すんなりと読者の心に届くんじゃないかと。現代の父親の話だから、現代を舞台にして書けばすんなりと届くとは限らない。テーマによっては、ちょっと回り道した方が書きやすいということは、あると思います。

今回がまさしくそうだったのですね。

あと、もうひとつ書いていて意外だったのは、間違いなく僕は父親から見た話を書いていたのですが、途中からおこがましくも僕自身が政次郎さんであり、同時に賢治だったということが分かりました。僕も商売をやっている家の長男ですが、家業を継ぐことはなかった。当時は夢中で、モノになるかも分からない原稿ばかり書いていた。程度の差こそあれ、社会的無能さにおいてまさに僕も賢治だったんだと。父親は僕が作家になる前に 59 歳で亡くなったので、(本心を)聞くことはできませんでしたが。



やっぱり、そういう長男を見ていたら嫌だな、育て方を失敗したかなとか、色々考えたんだろうなと。父親を書くつもりが途中から息子も書いて、結局は二人の関係も書いたつもりです。作品にとっては、それで良かったのかなと。偉人の数だけお父さんもいるわけですが、そのなかで宮沢賢治の父親を選んだのは、政次郎さんが現代にいてもおかしくない心の持ち主だと思ったからなんでしょうね。僕には政次郎さんの悩みが、21 世紀を生きるお父さんの悩みと同じように見えました。

政次郎が現代の父親像に通じる部分とは、具体的に言葉にすることはできますか？

ざっくりいうと息子への愛憎ということだと思います。例えばこれが江戸時代の武家家族になると、父と息子はそのまま経済単位になるわけですから、息子は跡継ぎという今よりも機能的な存在になる。そういう父と息子の在り方を、現代と同じですよと差し出すには無理があると思います。明治時代にもその名残はあるのですが、政次郎さんは例外的に質屋を営みお金持ちだった。その分、愛憎の念を抱くだけの余裕があった人なんですね。これが農家の生まれだったら、愛憎なんて言ってられない。子供も歩けるようになったら、田んぼを手伝えという時代ですから。極めて特殊なシチュエーションではあるのですが、それがゆえに明治にあって現代の我々と同じ心理を持つことができた、ということじゃないでしょうか。

拝読しながら政次郎や賢治にしろ、実際に会って聞いてきたかのように、それぞれの胸の内を細かく描写されていることに驚きました。資料を読むことで自ずと声が聞こえてくるような感覚があるのでしょうか。

資料から感じ取ったり、想像したり、どちらもあると思います。賢治に関しては、僕も同じように原稿が一枚も売れないという時代を長く経験してきたわけですから、そこはある程度、「賢治の気持ちは分かる」と言っ

てもいいでしょう。同時に、賢治とは時代もシチュエーションも違うので、それは僕の心であっても歴史的事実という枠をかけなければならない。面倒で苦しくもあり、楽しい作業でもありました。

作中には、父を越え、認められたいことへの賢治の渴望が描かれます。これは父親と息子ならではの関係なのかなと想像したのですが…。

男性だから分かる、女性だから分からないとか、あまり性の違いとかは感じたことはないですね。いずれにしても子供にとって親って厄介な存在だし、上から色んなものを押し付けてくる。でも頼りにしなきゃならない、子供にも弱味がある。そういうのは人間の普遍的な感情じゃないかな。

確かに、本著にある家族だからこその見捨てられなさや、感情のうごめきは、誰もが抱く感情だと思います。つい自分の境遇とも重ね合わせて考えてしまう瞬間がありますね。

そうですね。家族だから、というのはありますよね。嫌だから付き合いを止めようとか、できませんもんね。父親にとっての息子、息子にとっての父親、つまり親と子の関係があればこそ生きていけるし、それが足かせにもなる。何が正しいかどうかは読者が感じることであって、それをそのまま差し出すところまでが、小説の役割だと思うんですね。

「書かなければならないという、使命感があります！」

作風はミステリーから時代小説まで幅広く、題材も美術、建築、偉人と多岐にわたります。作品のテーマはどのようにして決まるのでしょうか。また作品へ向かわせる原動力とは？

僕の場合、仕事というのは仕事からしか生まれない。作品を書いていく中で、別のテーマが浮かんできたり。これも面白いな、読者の役に立つかなとか考えることが、次のテーマ選びに繋がります。ちなみに、一生かかって書けないほどのテーマがパソコンのメモにストックされています。作家だから当たり前ですが。

編集者からテーマを提示されることもあるそうですね。

その場合も、最終的に決めるのは僕なので。提示された内容と自分が持っているテーマとを擦り合わせる。例えば、僕が「出世欲とは何か」に興味があったとする。そこで編集者から、こんな面白い人がいますよと言われたときに、じゃあ「出世欲をテーマに描いてみよう」となる。結局、出世欲だけでは本にはならない。出世欲に突き動かされる人、他人の出世欲に困らされている人、などが小説になるわけです。興味のある人物やテーマは、いま抱えている仕事からしか生まれないというのが僕の実感です。「物語は、物語から生まれる」と言った方が、作家っぽいかな(笑)。



(笑)。テーマに限らず、小説を書く上で大事にされていることはありますか。

面白く、スラスラ読める、一度読んだら止められないのは、小説の基本的な機能であり大前提だと思うのですが、それに加えて、何かについて考えさせたい。あるいは読者と一緒に考えたいという思いがいつもある。これは僕の作家としての野心ですね。平たく言えば「ためになる」かもしれません。考える材料としての小説、読むことで、読者の考え方が変わったと言ってもらえるような小説だったら、最高だなと。あとは、2017年に本を出しているわけですから、同時代を生きている読者に届かないと意味がない。僕は歴史小説を書いています、気持ちとしては現代小説を書いている。そういう意味で、歴史を題材にする作家ではあっても、歴史作家ではないかもしれません。

作家として、一番楽しいと感じる瞬間は？

楽しい瞬間はほとんどないですね。これは今までの発言と矛盾するのかは分かりませんが。文章を書くというのは、苦しいことだらけです。我々の仕事は何かと言えば、一日中言葉選びをしているわけです。その中で、ごくたまに「この場所にはこの言葉しかありえない！」という言葉が、バチっとはまる瞬間があるんですね。それはもうほんとうに、楽しいというか、動物的な快感に近いですね。(脳内で)音が聞こえますから。バチって。

苦しくても書きつづけるのは、ある種の使命感によるものでしょうか。

使命感はあると思います。直接の答えになるか分かりませんが、仕事に対して「好きだから頑張れる」というのは、僕には意味がない。人間として本当に尊い行為というのは、「やらなければいけないから頑張る」。つまり自分のためではなく、人のためだから頑張れる。利己ではなく、利他的な行為の方が、人間的

に尊いんですね。僕が文章を書くのも基本的にはそこに通じます。少なくとも好きだから書いている人間ではないですね。読者のために書かなければいけないから書いている。どんな仕事もそうだと思います。

そこまで言い切って実践されているところが素敵です。

僕も「自分は良い人なんじゃないかなあ」と、薄々思っただけでした(笑)。

(笑)。ちなみに、健康面で気遣われていることはありますか。

家のまわりを散歩するぐらいで運動などは特にしていません。食事はお腹いっぱいになると頭が働かないので、腹五、六分ぐらいでと気を付けています。腹七分になると、感覚的にですが、頭の回転が鈍り始めますね。

作家として1番嬉しい褒め言葉は？

「面白かった」ですね。読者に考えてもらう部分も踏まえて、自発的に面白かったと思ってもらえるのが理想だと思います。「興味深い」に近い面白さかな。それを求めて僕は一生やっていくんでしょうね。

最後に、咲くやこの花コレクション『門井慶喜 講演会「歴史の真実は、いつもひとつ！」』について、一言メッセージを。

タイトルにもあるように、やや真面目な内容です(笑)。歴史を題材に書くときには「これしかない！」という真実に向かって書く。こうもああも考えられるというのは読者を混乱させるし、無責任ですね。真実を求めるには、こうと決められるまで調べなければならない、考え抜かななければならない。歴史には強い意志を持って対峙している、というお話ができればと思います。



★大阪名物を訊く！【私の、咲くやこの花賞】……

淀屋橋から見た川の夜景です。都会的なビルの夜景だけでもすごくきれいなのに、しかもそれが静かな川面に全部映っている。川幅も(眺めるのに)広すぎず狭すぎず、僕は好きですね。夜景見たさに、梅田で飲んでいても歩いて淀屋橋まで来るぐらい。星と同じで、冬の方がきれいに見える。気温が低いので、空気が含む水分の含有量が少ない。つまりその分、光が水蒸気によって拡散しないということなんじゃないかな。論理的でしょ(笑)。他の大都市にありそうでない風景だと思います。